

# オリオン座からの招待状

2007(平成19)年9月10日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★



監督＝三枝健起／原作＝浅田次郎（集英社刊『鉄道員』所収）／出演＝宮沢りえ／加瀬亮／宇崎竜童／田口モロヲ／樋口可南子／中原ひとみ／原田芳雄（東映配給／2007年日本映画／116分）

……シチリア島の「パラダイス座」や下関の「みなと劇場」に対して、こちらは京都のオリオン座。先代の跡を継いで半世紀以上守り続けてきたオリオン座も、遂に閉館することに……。思い出すのは、『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）と同じ昭和の古き良き時代。オリオン座と懐かしい映画の数々を通して紡がれる人間模様に、充足感と感動でいっぱいになるはず。『ALWAYS 三丁目の夕日』と『カーテンコール』（04年）の系譜に連なる名作が今誕生した！

## 『ALWAYS 三丁目の夕日』と『カーテンコール』の系譜に連なる名作が誕生！

2006年の第29回日本アカデミー賞で合計14部門を受賞し、今秋11月3日にはその続編が公開されるのが『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）。これは昭和33年に建設された東京タワーを象徴として、昭和30年代後半の昭和の良き時代を懐かしく回想した名作だった。

他方、佐々部清監督の『カーテンコール』（04年）は、下関にある映画館「みなと劇場」を舞台として、映画全盛時代であった昭和30年代の昭和の良き時代を懐かしむとともに、父と娘の情愛を感動的に描いた名作だった。

そんな昭和の良き時代、とりわけ映画（館）を中心とした昭和の良き時代の系譜に連なる名作が今誕生した。それが、浅田次郎原作の『鉄道員』（集英社刊）所収の『オリオン座からの招待状』を、同じタイトルで映画化したこの作品だ。さて、昭和30年代に京都にあったという小さな映画館「オリオン座」の栄枯盛衰と、その中で描かれる人間模様は……？

## 『ニュー・シネマ・パラダイス』の正当な継承者

イタリア・フランス合作映画の名作が、1989年のキネマ旬報ベストテン第7位に入った、ジュゼッペ・トルナトーレ監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』（89年）。深作欣二監督の『蒲田行進曲』（82年）は、映画への熱い思いをテーマとした日本映画の傑作だったが、『ニュー・シネマ・パラダイス』は、第2次世界大戦の敗戦国イタリアのシチリア島の小さな村にある唯一の映画館パラダイス座を舞台とした栄枯盛衰と、たった1人の映写技師アルフレードと彼にまわりつく少年トトの絆を描いた名作。

しかして『オリオン座からの招待状』は、一方で昭和30年代の良き昭和の時代の系譜に連なる映画であると同時に、あの名作『ニュー・シネマ・パラダイス』の正当な継承者……。

## 「オリオン座からの招待状」には何が……？

2007年8月某日、私の事務所に「オリオン座からの招待状」が届いた。そこには、「さて突然ではございますが、昭和25年の開館以来半世紀以上にわたって地元の皆様に愛され親しまれて参りました当オリオン座は、誠に勝手ながら今秋を持ちまして閉館いたすことと相成りました。つきましては謝恩最終興行を開催いたしますので、どなた様もご多忙中とは存じますが万障お繰り合わせのうえ来臨賜りますようお願い申し上げます。」とあった。これは一体ナニ……？ 一瞬私には何のことかわからなかったが、実はこれは『オリオン座からの招待状』のマスコミ試写のご案内の一節……。

映画の冒頭登場するのは、そんな招待状を読んで、ある決意を固めた良枝（樋口可南子）の姿。良枝は少女時代の昭和30年代、祐次（田口トモロヲ）と2人でオリオン座を一番の遊び場としていた少女だ。幼なじみの2人は当然のように結婚したが、数十年後の今2人は別居生活を続け、既に良枝は離婚を決意していた。待ち合わせの喫茶店に現れた祐次に対して離婚届を手渡ししながら、良枝は「オリオン座からの招待状」を示し、最終謝恩興行に一緒に行こうと提案したが……。

## トメさんの立場は微妙

重態となっている妻トメ（中原ひとみ）を前に、半世紀以上守ってきたオリオン座



©2007「オリオン座からの招待状」製作委員会

を閉館しようと決意し、「オリオン座からの招待状」を書いたのは、現在のトメさんこと仙波留吉（原田芳雄）。プレスシートのストーリー紹介の欄には、「妻トヨ」と書かれていたが、その他どこを読んでも、昭和30年代豊田松蔵（宇崎竜童）の妻であった豊田トヨ（宮沢りえ）が、松蔵死亡後オリオン座を継承した仙波留吉（加瀬亮）と再婚したという記載はない。また、私は原作を読んでいないが、きっと原作でもそれはないはず……。

昭和32年、滋賀県から京都にやってきた、誰一人身寄りもなく行き倒れになりそうだった17歳の青年がトメさん。そんなトメさんの「ここで働かせて下さい」との訴えをそのまま受け入れ、家族同様に面倒をみてくれた豊田松蔵は、トメさんにとって師匠であると同時に父親のような存在であったのは当然。

昭和30年代後半、そんな松蔵が死亡した後、「何があってもオリオン座をほかさん」という気持で松蔵の妻トヨと共に必死にオリオン座を守ってきたトメさんだったが、そのこととトヨとの結婚は全くの別問題。そりゃ、何年も何十年も1つ屋根の下で一緒に住み、24時間オリオン座の仕事をしていれば、普通の夫婦以上の強い絆が結ばれていることは当然だが、そのことと夫婦になることとは別問題……。

そういう人情の機微がわからなければ、昭和32年から平成19年まで続く、トヨとトメさんをメインにしたオリオン座をめぐる人間模様を理解し感動することはとてもム

り……？

## 私の昭和30年代とトメさんの昭和30年代

私は昭和24年生だから、昭和32年といえば8歳、つまり小学2年生の頃。いくらチョイ不良でも、映画館へ1人で行くようになったのは中学生になってから。しかし、小学生の頃は自宅から歩いて2、3分のところにあった東映の映画館へ両親によく連れていってもらったもの。そこでは東千代之介と中村錦之助が共演した『曾我兄弟 富士の夜襲』(56年)や片岡千恵蔵のギャングもの、そして美空ひばりのお姫サマものなどをたくさん観ていた記憶がある。

トメさんが滋賀県からオリオン座の前に流れ着いた昭和32年の夏、オリオン座にかかっていた映画は岸恵子の『君の名は』(53年)と高峰秀子の『二十四の瞳』(54年)の2本立て。私の中学時代は3本立て55円の映画館へ足しげく通っていたが、オリオン座の料金表によれば大人70円小人35円……。トメさんがお金をほとんど持っていない状況を察したトヨが、「料金はいいから」とタダで観せてやった太っ腹ぶりにはビックリしたが、それもあの時代なればこそ……？

## 『二十四の瞳』の名シーンなどが次々と

ほぼ満席状態のオリオン座内はかなり広く、座席数合計は、私のみところ約300席というところか……。途中入場したトメさんは何とか空いている席を見つけ出しスクリーンを見上げると、そこには高峰秀子が子供たちと汽車ポッポしながら一緒に汽車ポッポの歌を歌っているあの有名なシーンが……。2007年4月14日に私が松竹のリマスター版で観た、あの名シーンだ。

オリオン座を経営する松蔵が特に思い入れの深い映画は阪東妻三郎の『無法松の一生』(43年)で、軍部の検閲によってカットされたシーンへの思いなどが劇中で語られる。また、トメさんが最終謝恩興行でかけるのもこの『無法松の一生』。さらに、家庭用ビデオの普及によってトヨがトメさんを撮影しようとした時、トメさんがカメラの前で演ずるのは、阪東妻三郎が櫓の上で叩く太鼓の名場面の真似……。

その他あれこれ、映画少年だった私の記憶の中にたくさん詰め込まれているあんなシーン、こんなシーン、そしてあんなセリフ、こんなセリフがいっぱい。さらに、オリオン座の前の立て看板やポスターの懐かしいこと……。それだけでもう私の気持は、



©2007「オリオン座からの招待状」製作委員会

あの昭和30年代にタイムスリップ……。

## 🎬 京都人の本音と建前は……？

私は1974（昭和49）年の弁護士登録以降、今日まで33年間交通事故の示談事件を多数処理してきたが、相手方が京都人の場合、示談交渉が難航することが多いのは弁護士の常識。しかしてそれは一体なぜ……？ それは、あの柔らかな京都言葉とは裏腹に、京都人は本音と建前の違いが大きいため。たとえば、「金額のことは気にしなくてもいいヨ」というキレイな建前上の言葉が意味する本音は、「基準以上に支払わなければ、とことんゴネてやるぞ」ということ……？

昭和30年代といえば高層ビルなんてどこにもないから、隣り近所の親密なお付き合いがあったのは当然。したがって逆に、松蔵の死亡後、未亡人のトヨが使用人であった若いトメさんと同じ屋根の下で過ごしながらオリオン座を運営していれば、そりゃ何かと世間の目はうるさいもの。すなわち、「師匠のかみさんを寝取った若主人」「若い男に乗り換えた不義理な女将」などという、根も葉もないうわさ話があちこちでささやき始められることに……。

トメさんは、そんなうわさ話がトヨの耳に入らないようにと何かと努力したものの、興味本位のうわさというヤツはどうしようもないもの。私が思うに、利口なトヨはき

っとそんなうわさ話があることは理解していたはず。そして、そんなうわさ話がいくらあっても、自分やトメさんがしっかりしてオリオン座を守っていけば、きっと松蔵も喜んでくれると確信していたはず。そうだからこそ、『オリオン座からの招待状』という小説が生まれ、それをもとに感動的なこんな映画がつくられたわけだ。

あなたの周囲にも、きっとくだらないうわさ話がいっぱいあるだろうが、決してそんなものに耳を傾けることによって、あなたの信念を曲げてはダメ……。

## 狭い映写室は、人間ドラマに絶好の舞台

シチリア島の小さな村にあったパラダイス座の狭い映写室がトト少年の遊び場であり、映写技師アルフレードとのふれ合いの場所だった（『シネマルーム13』340頁）が、パラダイス座は火災となったため、その再建に時間がかかってしまった。しかし、京都にあるオリオン座は、下関にあったみなと劇場（『シネマルーム7』296頁）と同じように、昭和30年代から50年以上上映を続けてきた映画館だから立派なもの……。

映写室での仕事は一見楽しそうだが、松蔵が言う「わたらの仕事、盆も正月もあれへん、一日中狭い部屋閉じこもって、おんなじシャシン、なんべんもなんべんも、見なあかん」という言葉を聞くと、大変な仕事。若き青年トメさんは、それに対して「……ええです。そない、ええことあらへん」と答えてその仕事に飛び込んでいったわけだが、それから50有余年……。

「斜陽の時代はしんどかった。フィルム代を払えない時もあった。店のアンパンで食事を済ませたこともあった。ピンクかけよかと思ったこともあった。しかし、それでは子供らが映画観られなくなる。そう思ってリバイバルをかけてきた……」とオリオン座の歴史を総括するトメさんの言葉を聞いていると思わず涙が……。トメさんがかける最後の映画は、もちろん『無法松の一生』の阪東妻三郎版。そして最終謝恩興行の映画案内でトメさんの傍に座るのは、病院のベッドからトメさんが背中におんぶして連れ出してきた妻トヨだ。

上映終了後、あの時、あの蚊帳の中で2匹のホタルの光を見ながらはじめて手を握り合ったと言いながら、トヨは静かに息を引きとっていくわけだが、こんな狭い映写室は人間ドラマに絶好の舞台。50年以上にわたる思い出がすべて凝縮されているこの一瞬を、心ゆくまで味わいたいものだ。

2007(平成19)年9月12日記